

六家詩巻二

ル 4
4985
2



門
號 4985
卷 2



舊蹟遺聞卷二目錄

志波郡

志波城

志加里和氣神社

比爪

比爪五郎季衡之墓

陣岡蜂社

高水寺

和我郡



舊蹟遺聞卷二目錄

黒澤尻
稗貫郡

舊蹟遺聞卷二

舊蹟遺聞卷第二

志波郡

志波郡を今も志波のつら。古書に子波斯波と書けり。今志和と書
物志古く志波といふ。日本逸史延暦八年六月庚辰征夷
將軍奏稱。膽澤之地賊奴奥區。方今大軍征討。剪除
村邑。餘黨伏竄。殺畧人物。又子波和賀僻在深奥。臣
等遠欲薄伐。運糧有難。其從王造塞。至衣川營四日。
輜重受納二箇日。然則往還十日。從衣川至子波地。
往還廿四日程也。途中逢賊相戰。及妨雨不進之日。
不入程内。河陸兩道輜重壹萬貳千四百四十人。

志波郡の古き郡のまゝにふるまはるるに
 やまの村といひしを、寛字八年又いへるに、いま郡は
 定められざるおのりといへり。こゝに大和をわたり大和の
 里より出づ。一國の名をまはるるに、むく村の名は郡の
 名に成るるやあらん。

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

志波城

今志波郡山ノボリのあらしの古き城乃あり。あるにれあり。古き書
 よいへるに。日本逸史に。延暦廿二年二月癸巳。今
 越後國、米三十斛、鹽三十斛、送造志波城所云々。又
 同書に。同年三月。造志波城使。從三位行近衛中將。
 坂上田村麻呂。辭見賜彩帛五十匹。綿三百屯云々。
 東鑑文治五年乃條に。四日辛酉。著御于志波郡。而
 泰衡親昵。俊衡法師驚此。車燒失。當郡内比爪館。逐
 電赴奥方云々。
 考ふるに延暦の時造まる城を、郡山の古城なりと傳ふ

志波の比叡の館といふは、この志波の城乃あるか
まへりのたかみん。

志加里和氣神社

志のつりけの神社を、今志波郡、郡山の邊に赤石明神といふ
あり、この神社なりといふ。こゝを和氣と志加里和氣神社と定
められしと、その後火を食ひて、古き縁起神座やうの物語に
いふ、今志波のむきより、その定められしより、いままで、た
ある證こそあつて、いげの社の古書より、延喜神名
式に、陸奥國斯波郡一座、小志加里和氣神社、あり、
文徳實録に、仁壽二年八月辛未、陸奥國伊豆佐味
神、登奈考志神、志加里和氣神、並加、正五位下、云々。
考るるに、神名式に宮城郡に伊豆佐味神社あり、氣仙郡に登

奈考志神祇あり。

孝の字文徳實録
よき考とらむ

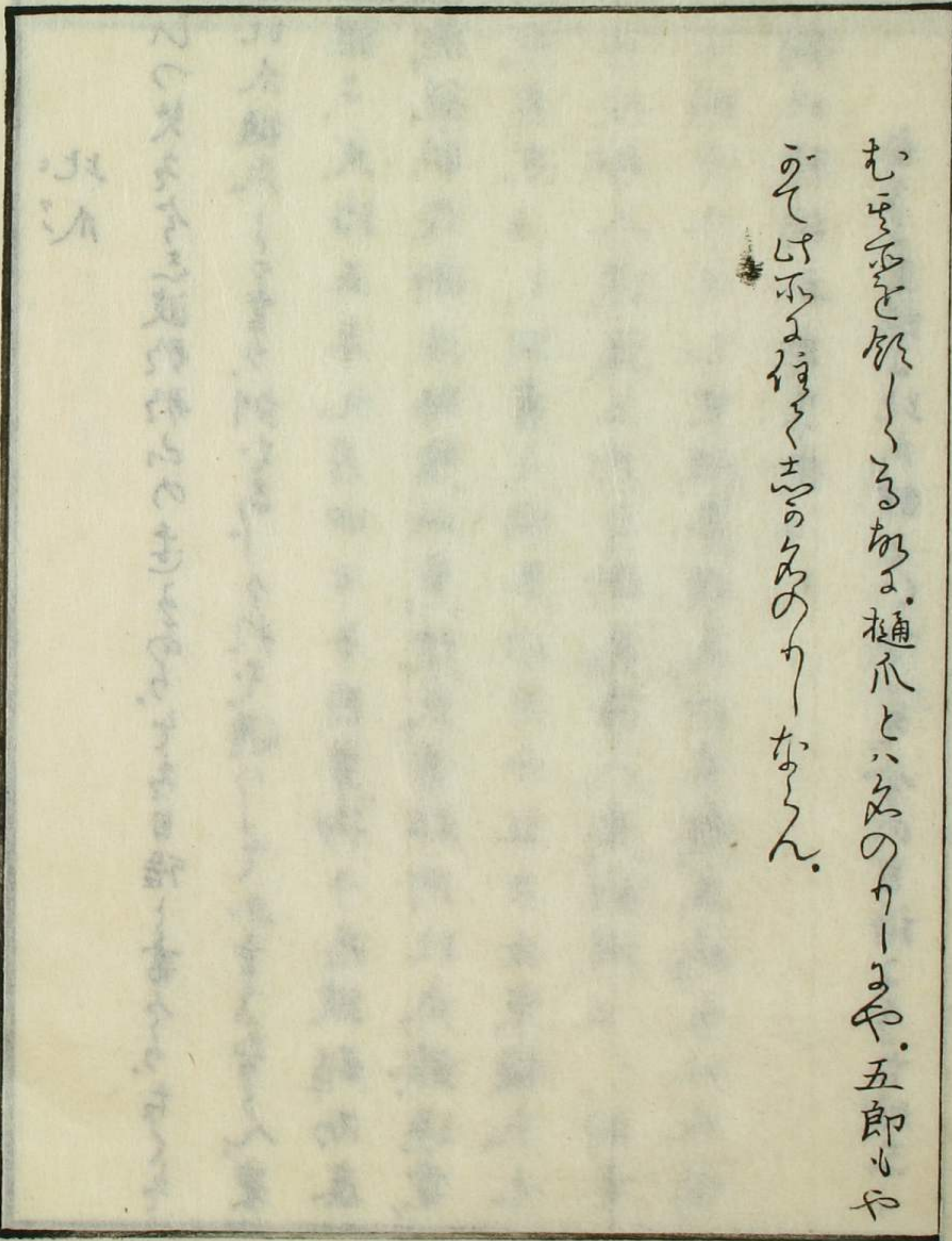
[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

比爪

いつたを今志波郡那山の邊にあり。と今日語と書なり。古く之
比爪樋爪との言なり。訓おろしを。通つてかきよるなり。東
鑑に。文治五年九月四日辛酉。著御子志波郡。而泰
衡親。肥俊。衡法師。驚此事。燒失。常郡内比爪館。逐電
赴奥方。云々。同書に。同年同月十五日壬申。樋爪太
郎俊衡入道。並五郎季衡。為降人。參對河。云々。同書
に。同十八日乙亥。被奉消息。於京都。其狀云。比爪俊
衡法師。同五郎季衡云々。

考るる東鑑に比爪館とある。今の日語より古城あり

むすぶを飲くもあま。植瓜とハ名のり。五郎もや
おしげふまほくまのあのみり。なまん。



比爪五郎季衡之墓

志波那比爪今日浩とと云ふ所。館のあとあり。そこより南のうへ
十四丁丁より五郎沼と云ふあり。そこは比爪五郎季衡の墓あり。
碑五郎沼といふ所の五郎の墓ありと云ふ文字この季衡ハ泰あり。文字この季衡ハ泰ききえく。五郎沼といふ所の五郎の墓あり。泰
衡が親昵俊衡が骨なり。東鑑云。九月十八日都にきて。ついで
息。比爪俊衡法師。同五郎季衡等。焼比爪館。逃ケ籠ケ奥之方と。即追
継ぐ。尉河と申館。るが子看る。俊衡法師。再季衡等。為降人。出
来。注折紙。謹進上之。其中俊衡法師者。年齒言候。上。今受持法
華經。充テ本住所。所令安堵候也。主外單。皆召具て。鍾余へ可上
道候云々。

考るに季衛ハ謙倉ノ上ニ居るよりゆれと兄の俊衛也
罪とあるされて、その位亦あゝむるよりゆきば、
季衛も後よりよきうてみすのちたるべし。されど
今も墓の跡ありあるなり。

志波郡郡山の西八九丁あ形との廣野に陣岡蜂社の名跡あり。
東鑑に文治五年九月四日辛酉、著御于志波郡、畧
今日二品令陳于陣岡蜂社給之。又同書に十一
日戊辰今日令立陣岡云々。

陣岡蜂社

考るに、土人義家於此の陣跡よりその名をうとひ
をよみて、ゆきとちよといへる。これ於の泰衛を征伐し
給へ、古に義家家の於此のあ倍の責任を征平
らけ給ひ、時のあゝり給ひやるといふ。されど
東鑑文治五年九月二日の條に、出平泉令赴

岩井郡井手の厨河辺給是為相尋泰衡あさま隱任所也亦祖父將軍追討朝敵之頃十二年之間處合戦不決勝負送年之儀遂於件厨河柵獲貞任等首依曩祖佳例到當所可討泰衡獲其首之由内々令思案給あど之様そののみあひび不不曩祖の例又なほい給しそとあゆれがこの陣も我義家の新伝の御軍と病し給しあとも又新伝もよいしを集へ給しあくんさうば陣も義家の新伝のやぶり給しより給ふ新伝やとおもたるさう蜂の社この陣ものちよ小初のある等則これありといひ傳ふこと

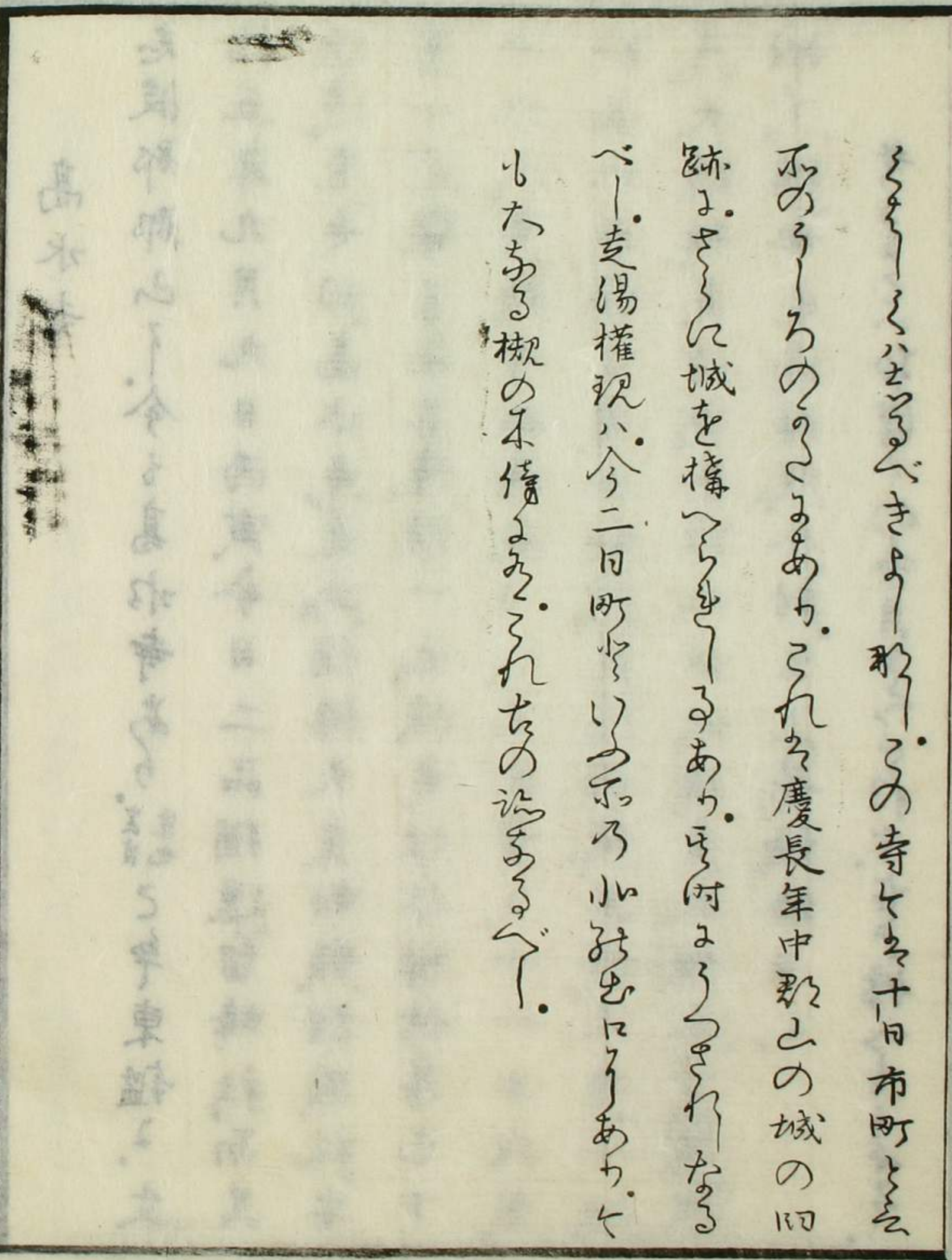
義家新伝のいふ社を建給しあといつれど今考ふるやかゝるその社と八幡の社ちやまされど蜂の社と八の音もあれどこれを後の世にかゝあやまりなくん今縁記よりその蜂の社とありこの縁記を後世に傳ふもの傳ふるものとあゆむと古のものを給ふこれ

高水寺

志波郡郡山。今も高水寺あり。其言乙卯東鑑。文
治五年九月九日丙寅。今日二品猶逗留蜂社。而其
近邊有寺。曰高水寺。是為稱徳天皇勅願。諸國被安
置一丈觀自在菩薩。隨一也。彼寺住侶禪修。房已下
十六人。參詣于此旅店云々。又同書。十一日戊辰。
中高水寺鎮守者奉勸請。走湯權現。其傍又有小社。
号大道祖。是清衡勸請也。此社後有大槻木。二品蒞彼
樹下。稱奉走湯權現。令射立上箭。鏑給云々。
考るると、お原々の年月とて、れを古き傳へも、うせ。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

とていふにききよし。その寺々十日市町とて
ありしものあり。これを慶長年中郡山の城の跡
跡より城を構へしあり。其時よりいふなり
べし。走湯権現。今二日町といふ所。北に山あり。そ
もたある。柳の木備ふ。これ古の跡あり。



和我郡

和我郡、今花牧といふ所。和歌川のほとり。そのもとに
いへり。古書よ。とて。續紀。天平九年四月戊午。
陸奥持節大使従三位藤原麻呂奏狀云。文。和我君
計。安墨遣。山道。並以使。旨。慰諭鎮撫之。ま。日本逸
史。弘仁二年正月丙午。於陸奥國置。和我。稗。縫。斯
波。三郡。云。同書。延暦八年六月庚辰。征東將軍
奏。稱。膽。澤。之。地。賊。奴。與。區。方。今。太。軍。征。討。剪。除。村。邑。
餘。黨。伏。竄。殺。畧。人。物。又。子。波。和。我。僻。在。深。奥。云。又
東鑑。文。治。五。年。九。月。廿。三。日。畧。傳。領。奥。六。郡。伊。澤。江。刺。

和我 志波 云 同書 同年十月八日甲子 畧葛西
裨技 岩手

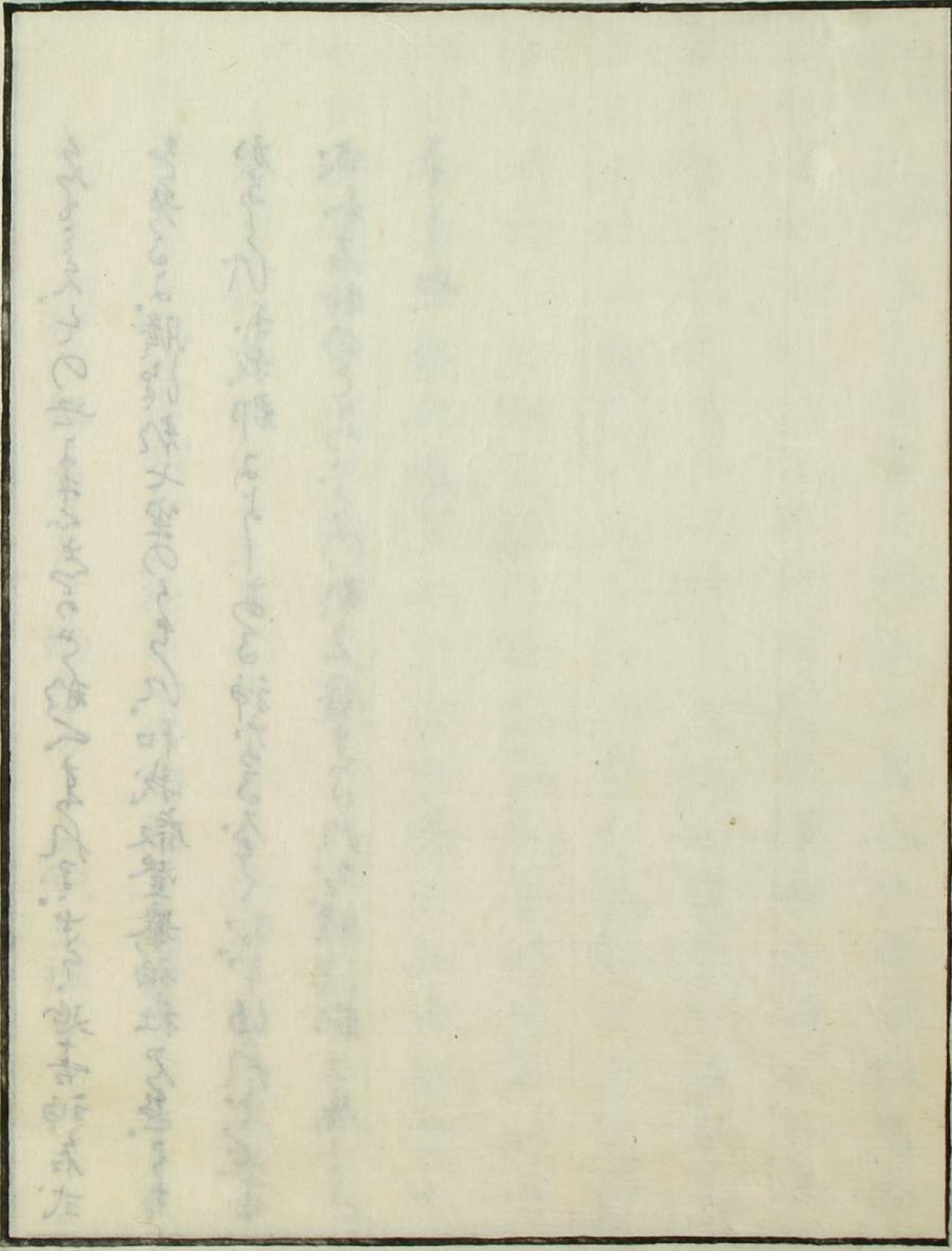
三郎清重依被仰付奥州所務事還御之時不令供奉所留彼國也仍今日條々有被仰遣事先國中今年有稼穡不熟愁之上二品相具多勢數日令逗留給之間民戸殆難安堵之由就聞食畧仍岩井伊澤柄差以上三箇郡者自山北方可農新和我部貫分者自秋田郡可被下行種子也云

考云と和我弘仁二年と初と定められたるを以後云々
まゝと云や延喜式和名抄云々の國郡をあやうく云々
と云はかりに云々云々郡あり云々や東嶺云々

らも云々そのせよ云々と初とあれと云々延喜神名式
を考ふるよ膳海郡七坐の云々和我殿登攀神社云々
かまひ和我郡よりある神なる云々おがゆれど延喜
式和名抄のころこの郡名廢せられ膳海郡に属し
る云々や

黒澤尻

黒澤尻と、和賀郡の内あり。古き城跡ありあるを、黒澤尻の
柵なり。古書よその名れいゝるを。東鑑に、文治五年九
月廿七日甲申、二品歴覧、安倍頼時、衣河遺跡、給郭
土空、秋草鎖、方數十町。礎石何在。舊苔埋、方百餘
年。頼時、掠領國郡之昔。此所構家屋、男子者、并殿、盲
者、厨河次郎貞任、鳥海三郎宗任、境講師官照、黒澤
尻、五郎正任、白鳥八郎行任也。又、前太正記、世一
に、かゝる軍勢の海に逗留あり、軍勢と、此方、賊と
攻と、貞任、弟四郎正任、かゝる、和賀郡、黒澤尻の



柵^キつゝ八幡殿を大拓せしめて二子五百餘騎をさすむる
云々

考るに東鑑よのせしむる時が子尉河を海境黒澤尻白鳥
之取不のちとてこれにせしむるを名のりたるべし
正任を黒澤尻の柵と傳へしは黒澤尻五郎と名のりたるべし
前太子記に四郎と名のりたる五郎のあやまちあるべし昔
ハ太郎次郎三郎あどつぎくは呼ばれり東鑑の文より五
人めれり然るにやいぢとて又井殿と名のりたるもの
よしとて呼名とせしめんと考るより也

稗貫郡

稗貫郡をなすは古書に之をみるハ日本逸
史に弘仁二年正月丙申朔丙午於陸奥國置和我
稗縫斯波三郡云々東鑑に文治五年九月廿三日
中傳領奥六郡伊澤 和賀 志波 江刺 稗枝 岩手まの同書に同年十
月八日甲子葛西三郎清重依被仰付奥州所務事
中和我部貫兩郡分者自秋田郡可被下行種子也
云々

考るに稗縫稗枝部貫あはれは皆同なるべし
やうに稗縫のちりあるを又ヒとヌキと通りいへるハ後世

のりあるべし。裨枝ハ、新刊の東鑑ニヒエ、キと訓を付し
まじ。枝ハ、枝をあやまれるか、ん。又部貫とある也。今も
土人ヒエをへとのいふれば、ヒエの反へま又拾芥抄ニ裨継とあるハ、裨
部貫と書し、此ハ普通なり又拾芥抄ニ裨継とあるハ、裨
縫のあやりの。継と継とま虫の形の如し、ハ日本あやま
るあ、ん、ハ裨貫と書す。

舊蹟遺聞卷第二 終

